

第 4 問

【解答】

問 1

費目	合計	製造部門		補助部門	
		第 1 製造部	第 2 製造部	修繕部	倉庫部
部門費	345,000	104,000	99,000	78,000	64,000
修繕部費	78,000	36,000	42,000		
倉庫部費	64,000	40,000	24,000		
製造部門費	345,000	180,000	165,000		

問 2

製造間接費—第 1 製造部門			仕掛品		
諸口	182,000	仕掛品 (172,800)	製造間接費—第 1 製造部	(172,800)	
		配賦差異 (9,200)	製造間接費—第 2 製造部	(150,000)	
	182,000	182,000			

製造間接費—第 2 製造部門			仕掛品		
諸口	144,500	仕掛品 (150,000)			
配賦差異	(5,500)				
	(150,000)	(150,000)			

【解説】

予定配賦による部門別計算の基本的な問題である。補助部門費の配賦や予定配賦率の計算を正確に理解する必要がある。

問 1 月次予算部門別配賦表の作成

月次予算部門別配賦表は、[資料](1)のデータにより作成するが、ここでは補助部門費の配賦は直接配賦法で行う。直接配賦法では、補助部門間の用役(サービス)の授受は計算上無視する。したがって、修繕部費は第 1 製造部と第 2 製造部の修繕時間の割合で、また、倉庫部費は第 1 製造部と第 2 製造部の材料運搬回数の割合で次のように配賦する。

<修繕部費の配賦：配賦基準は修繕時間>

$$\text{第 1 製造部への配賦額} = \frac{78,000\text{円}}{60\text{時間} + 70\text{時間}} \times 60\text{時間} = 36,000\text{円}$$

$$\text{第 2 製造部への配賦額} : \frac{78,000\text{円}}{60\text{時間}+70\text{時間}} \times 70\text{時間} = 42,000\text{円}$$

<倉庫部費の配賦：配賦基準は材料運搬回数>

$$\text{第 1 製造部への配賦額} : \frac{64,000\text{円}}{20\text{回}+12\text{回}} \times 20\text{回} = 40,000\text{円}$$

$$\text{第 2 製造部への配賦額} : \frac{64,000\text{円}}{20\text{回}+12\text{回}} \times 12\text{回} = 24,000\text{円}$$

これにより、補助部門費配賦後の製造部門費は、次のようになる。

$$\text{第 1 製造部門費} : 104,000\text{円} + 36,000\text{円} + 40,000\text{円} = 180,000\text{円}$$

$$\text{第 2 製造部門費} : 99,000\text{円} + 42,000\text{円} + 24,000\text{円} = 165,000\text{円}$$

問 2 各勘定の記入

本間は、製造間接費を予定配賦しているため、製造間接費勘定の貸方は予定配賦額で記入する。予定配賦額は、「実際配賦基準数値×予定配賦率」で求められる。

① 予定配賦率の計算

各製造部門の予定配賦率は、予定部門別配賦表の製造部門費の金額（補助部門費配賦後の製造部門費）を予定機械稼働時間で割ることにより算定できる。

$$\text{第 1 製造部予定配賦率} : \frac{180,000\text{円}}{1,500\text{時間}} = 120\text{円/時間}$$

$$\text{第 2 製造部予定配賦率} : \frac{165,000\text{円}}{1,100\text{時間}} = 150\text{円/時間}$$

② 予定配賦額の計算

$$\text{第 1 製造部の予定配賦額} : 1,440\text{時間} \times 120\text{円/時間} = \underline{172,800\text{円}}$$

↑
(製造間接費—第 1 製造部勘定の「仕掛品」の金額)

$$\text{第 2 製造部の予定配賦額} : 1,000\text{時間} \times 150\text{円/時間} = \underline{150,000\text{円}}$$

↑
(製造間接費—第 2 製造部勘定の「仕掛品」の金額)

③ 配賦差異の計算

(製造部門費)配賦差異は、製造部門ごとに予定配賦額と実際発生額の差額として算定する。

$$\text{第 1 製造部配賦差異} : 172,800\text{円 (予定配賦額)} - 182,000\text{円 (実際発生額)} = -9,200\text{円 (借方差異)}$$

$$\text{第 2 製造部配賦差異} : 150,000\text{円 (予定配賦額)} - 144,500\text{円 (実際発生額)} = 5,500\text{円 (貸方差異)}$$

新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト P.100～109 ページ参照

第 5 問

【解答】

問 1 固定製造間接費の標準配賦率 = 円/時間問 2 当月の標準配賦額 = 円問 3 製造間接費差異 = 円 (有利 ・ 不利 差異)予 算 差 異 = 円 (有利 ・ 不利 差異)能 率 差 異 = 円 (有利 ・ 不利 差異)操 業 度 差 異 = 円 (有利 ・ 不利 差異)

(注) () 内の「有利」または「不利」を○で囲むこと。

【解説】

標準原価計算における製造間接費の差異分析に関する基本的な問題である。変動予算における 3 分法の計算を正確に理解する必要がある。

問 1 固定製造間接費の標準配賦率の計算

変動予算の標準配賦率は、固定製造間接費の標準配賦率と変動製造間接費の標準配賦率からなる。標準配賦率は、予算額を基準（正常）操業度で割ることにより算定できる。本問の基準（正常）操業度は 9,000 時間（[資料]2 より）、固定費予算額は 3,780,000 円（[資料]6 より）であり、標準配賦率は次のように計算される。

$$\text{固定製造間接費の標準配賦率} : \frac{3,780,000\text{円}}{9,000\text{時間}} = 420\text{円/時間}$$

なお、製造間接費標準配賦率は 780 円/時間（[資料]3 より）であるため、変動製造間接費の標準配賦率は 360 円/時間（=780 円/時間－420 円/時間）になる。

問 2 当月の標準配賦額の計算

標準配賦額は、「標準操業度×標準配賦率」で算定される。このとき、標準操業度は、完成品の数量ではなく、当月投入の数量に基づき計算する。また、製造間接費は加工費であるため、加工進捗度を考慮に入れた数量（完成品換算数量）で計算する点も注意が必要である。これらの計算は、次のようなボックス図を用いると理解しやすい。

仕掛品		
月初	400 (800×50%)	完成品 4,300
当月投入	4,100	
		月末 200 (400×50%)

標準操業度（標準直接作業時間）：4,100 個×2 時間=8,200 時間

これにより、標準配賦額は次のように計算できる。

標準配賦額：8,200 時間×780 円/時間（[資料]3 より）=6,396,000 円

問 3 製造間接費の差異分析

製造間接費差異およびその差異分析による予算差異、能率差異、操業度差異は、次のように算定できる。

①製造間接費差異 = 標準配賦額－製造間接費実際発生額

= 6,396,000 円（問 2 より）－6,890,000 円（[資料]6 より）

= -494,000 円（不利差異）

②予算差異 = 実際操業度における製造間接費予算額－製造間接費実際発生額

= {(実際操業度×変動製造間接費の標準配賦額)+固定費予算額}

－製造間接費実際発生額

= {(8,500 時間×360 円/時間)+3,780,000 円}－6,890,000 円

= -50,000 円（不利差異）

③能率差異 = (標準操業度－実際操業度) × 標準配賦率

= (8,200 時間－8,500 時間) × 780 円/時間

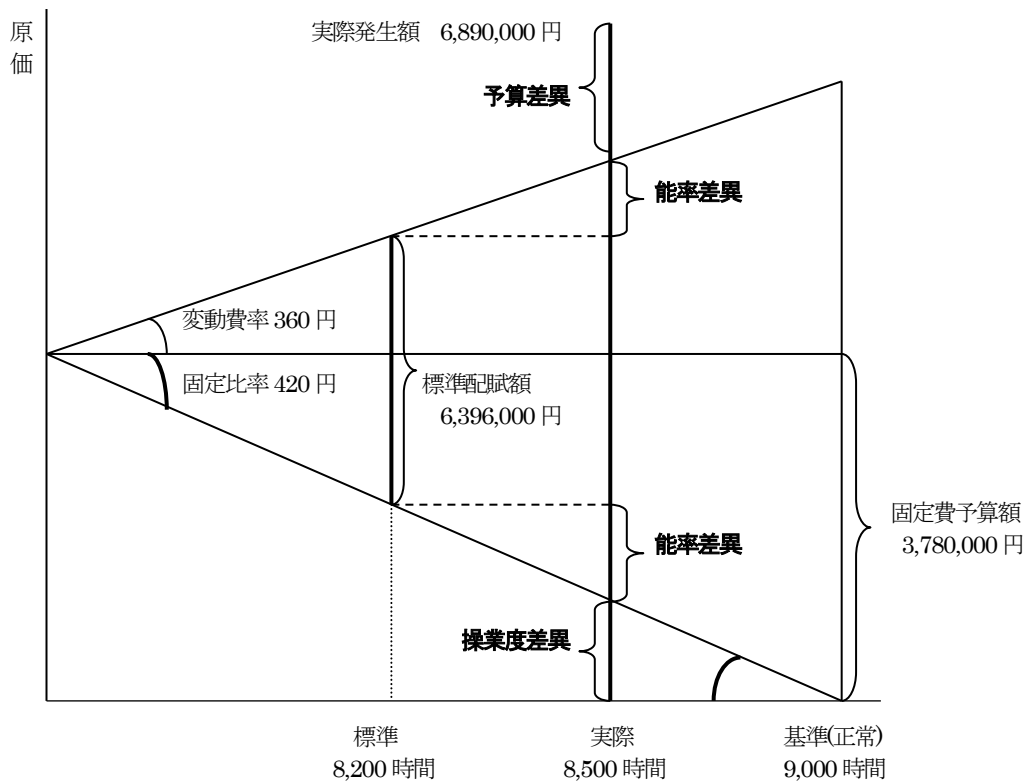
= -234,000 円（不利差異）

④操業度差異 = (実際操業度－基準(正常)操業度) × 固定製造間接費の標準配賦率

= (8,500 時間－9,000 時間) × 420 円/時間

= -210,000 円（不利差異）

なお、製造間接費差異の分析では、次のような図を描くと分かりやすい。



新版日商簿記 2 級工業簿記 テキスト P.189~P.190、P.197~P.200 参照